

<監訳者プロフィール>

加藤睦彦 (かとう・むつひこ)

専門学校で講師をしながら、

2010年バベル翻訳大学院修了。

主に技術翻訳を手がける。



主にロマンス小説を手がけてきたアリシャ・ペイジが、初めて執筆したノンフィクション作品です。

1973年のクリスマスの雪の夜、15歳のベティー・リー・ハンソンは、友人とヒッチハイクをしました。しかし、車に乗せてくれた男は殺人鬼でした。ベティーは、重傷を負いながらも生き延びたのですが、それだけではなかったのです。犯人のラルフ・アンドリュースはこの事件で罪を問われず、その後も司直の手を逃れ、およそ20年後に終身刑を受けるまで殺人を続けました。ベティーは犯人から決して逃げませんでした。裁判が行われるたび傍聴に、必要があれば証言を行い、戦い続けました。

本書は、ベティーの憎しみ、怒り、罪悪感、祈りといった感情を、回想記の形で生々しく綴っています。

ジャンルとしては犯罪ノンフィクションになる作品ですが、内容紹介の文章から受ける印象とは全く違う読後感をもつはずで、一連の事件や犯人の姿は、ベティーの目を通して、語られるからです。

使われている単語は平易で、複雑な構文などもなく、調べ物もさほど必要はありません。ですが、いざ訳すとなると簡単ではありません。ベティーの激しい感情を伝えなければいけないからです。英語力よりも、むしろ日本語の表現力を問われると言ってもいいでしょう。

ベティーの声を日本の読者に伝えられるような翻訳を仕上げたいと思っています。皆様のご応募をお待ちしています。